

失敗から学ぶこと



校長室だより第39号では「心理的安全性」のお話をしました。その中でも「失敗」についてコメントしました。失敗は誰にでもあります。その失敗を声に出して言えること、そして組織としてその失敗をどう乗り越えたり、次に生かしていく方法を見出したりすることが大切であるというような内容でした。

今回はアドラー心理学の考え方を参考に失敗について考えてみたいと思います。

○失敗は恥じるものではなく「学ぶもの」

発明王エジソンは次の言葉を残しています。「私は失敗したことがない。うまくいかないやり方を1万通り見付けただけだ」

私たち人間は人生の中で何度も失敗を繰り返し、その中から何かを学び、成長する。それは、私たちが子どもだったころから繰り返されてきたことだ。ところが、大人になると人間は失敗を恐れるようになる。失敗することを恥ずかしいと思ったり、批判や叱責されることを恐れたりするからだ。

しかし、アドラーは言う。「挑戦には失敗がつきものである。失敗したら、失敗を認め、失敗から学ばばいい」もしもエジソンが最初の失敗を恥じ、以降の発明をやめていたとしたら、発明王は誕生しなかったし、数々の生活必需品もこの世に存在しなかっただろう。



1月末に定期テストが終わり、2月に返却されました。複数の生徒からのつぶやきです。「テストを見せたら点数が悪いと怒られた」「なぜできないのか」「そんな点数だと私(親)が恥ずかしいと言われた」等々。

先週はPTAの会が続いたので、私からもお願いしました。「たとえ点数が悪くても、頑張ったことを評価し、次につなげるようにしてもらえませんか」

2年生のPTAで、学年の学習担当の話です。

すべてのテストが返されましたが、ご覧になりましたか？(※この時は、多くの保護者の方が見てない方に手を上げました。)点数は客観的なものなので、気になると思います。では、分からない問題には手をつけずに80点をとった生徒と、分からない問題でも解いてみようと思えばすべての問題を鉛筆で真っ黒になるまで解いてみて結果60点だった生徒、どちらが伸びると思いますか。この場合なら真っ黒にした60点の生徒の方がこれから伸びると思うのです。ですから、テストの取組の様子を見てほしいのです。

エジソンやアドラーの言葉に当てはめれば、テストの点が悪いこと＝失敗、真っ黒＝うまくいかない方法、となるのでしょうか。うまくいかない方法であっても真っ黒にするほど自分で考えたことは必ず次につながります。そして、その失敗を恐れているのは実は大人？＝親、保護者なのかもしれません。(校長のたわ事として流してください)

生徒の学習やテストはこれからも続きます。私たち大人に大切なことは、いかにモチベーションを高めたり、継続させたりすることではないかと思えます。モチベーションがあれば、生徒はどんどん自分から進んでいきます。その環境づくりが大切ではないかと思うのです。

校長室だより第13号「テストの後、保護者は？」の回で、同じような話をしました。ざっくり言えば、「点数にこだわるのは当然ですが、点数が悪くてもその間違い方に注目してみませんか」という内容です。よろしければご覧になってください。※校長室だよりは本校のホームページ「おたより」→「校長室だより」→下のバックナンバーの数字をクリックで検索、ダウンロードできます。

大人が失敗を恐れるようになる？

体育祭や卒業式などの行事では、事前の練習をします。スポーツの対外競技でも勝つためや点数を上げるための練習をします。当然、行事を成功させる、結果を出すためです。

テストなども同様です。どれだけ準備をしてきたかが、大切なのです。アドラーの「挑戦には失敗がつきものである。失敗したら、失敗を認め、失敗から学ばばいい」の言葉から思うことは、例えば、テスト＝挑戦であれば、失敗もある、そこからいかに学ぶかだと思います。それをどう支えていくか、大人の言葉がけ一つで前向きにも後ろ向きにもなるように思います。

また、「大人が失敗を恐れる」があまり、子どもに挑戦させていないことはないでしょうか。大人が先にレールを敷いてしまう、子どもが考える場面を失っていく。大人が先に子どものことを代弁してしまう。これでは子どもは失敗をしないかもしれませんが、学ぶべき機会を失っているようにも思うのです。

親にとって「自分の子どもはかわいい、だから失敗を経験させずに成功の道を歩ませたい。」と思うのは当然のことです。かといって先回りばかりすることはどうなのかと思います。昔から「可愛い子には旅をさせよ」という言葉があります。子どもが本当に可愛いなら、甘やかさずに少し大変な経験をさせた方が、その子の成長につながるという教えです。昔の「旅」は今のよう楽しい旅行ではなく、苦労や危険を伴う修行のようなものでした。そのため、ここでいう「旅」は「世の中でさまざまな経験を経験すること」のたとえです。



どこまで大変な経験をさせるか、どこまで挑戦させるかのさじ加減はとても難しいと思います。このたよりを読んでいただいている皆さまのお子さんは中学生です。中学生であれば、向き合う時間を作ることで、彼らは自分の思いや願いを語れると思います。まだうまく言葉にできないかもしれませんが、しかし、決して上からではなく、じっくりと向き合ってほしいと思います。テストについても点数だけにこだわらずに、少し冷静になり、テストに取り組んだ様子を見ながら、次につながる話し合いをしてほしいのです。

失敗を次につなげるための訓練とは、ポジティブになるために

○「でも」という言葉を使わない。「3D言葉」を使わない

ネガティブな人が使うログセに「でも」「だって」「どうせ」がある。これを総称して「3D言葉」と呼ぶ。自分を好きになれない人、自信がない人、行動できない人、自分を変えられない人は、この言葉を使って言い訳をする。



ダイエットしたい人が「でも、運動は苦しくてしんどいから」と逃げ出す。営業（商品売の仕事等）がうまくいかない人が、「だって、他社製品のほうが知名度があるから」とめげてしまう。好きな人がいても、「どうせ、告白してもフラれるだけ」とあきらめる。これらはすべてやることをあきらめ、「やらない理由」を探しているに過ぎない。言い訳を並べてやらずに済むようにしているだけだ。このような言葉を使っている人は、人生の課題が解決することはないし、むしろ夢から遠ざかるばかりである。

アドラーは「ためらいの態度をとらないように訓練することだ」と言っている。その訓練のために必要なのが「勇気づけ」である。アドラー心理学で言う「勇気づけ」とは「困難に立ち向かい、乗り越えるための活力を与えること」を指す。勇気づけをするためには、「自分には課題を達成する能力がある」という自信を持つことだ。

言葉には力があり、言葉を変えれば行動も変わり、言い訳がなくなる。すると挑戦へのためらいの気持ちが減っていくはずだ。

私たち大人も意外と「3D言葉」を使っています。ましてや失敗したり、うまくいかなかったりしたとき、子どもはこのような言い訳をしがちです。子どもにいかに「勇気づけ」をしていくかをみんなで考え、知恵を出し合い、挑戦し続ける子どもに育てていきたいものです。

引用 「アドラー心理学がマンガで3時間でマスターできる本」 吉田 浩著明日香出版社